

座談会 ●

半農公務員から見た日本の「農」

木幡 啓郎 ・自治労宮城県本部書記長

小原 大 ・岩手県環境生活部県民くらしの安全課主任

進行 ●

座光寺 成夫 ・自治労本部総合政治政策局政策局長

日本の農家の約七割を占める兼業農家のなかには、もちろん自治体職員も少なくない。ある意味では典型的な日本の農業の担い手ともいえる。半農公務員から見た、日本の「農」の現場からの声をうかがった。

座光寺 組合員のなかには、兼業で農業

にも携わっている方が少なくないということ、いわば「半農公務員」のみなさんのお話をうかがって、日本の農業の「いま」を現場の目から語っていただこうということ、本日はお集まりいただきありがとうございます。まずは自己紹介を兼ねて、お話をい

ただけますか。

● 農業との関わり

木幡 宮城県本部の書記長をしております木幡です。宮城県の角田市という、福島との県境に近いところの出身です。二〇一五年四月から専従になりましたが、そ

の前は角田市の農政課で係長をしておりまして、農業高校、農業短大出身だったものですから、役所に入ったときも農業の担当をしばらくやっておりました。農林振興係ということで、田んぼ以外はみんな私の係で担当しているような状況でした。最近ですとイノシシ被害が大きいものですから、その対策なども担当していました。

家の方では、田んぼを五〇aほど、野菜は三〇a程度でやっておりまして、野菜は週に二回くらい出荷しています。基本的には両親でやっていましたが、父が三年前に亡くなっても母は続けたいというので、親孝行のつもりで機械を使っての耕耘ですとか、草刈り、出荷などを手伝っています。

小原 岩手県庁の小原大です。出身は宮沢賢治のふるさと岩手県花巻市です。いまの職場は県庁の県民くらしの安全課というところで、職場は保健所の統括、生活衛生など、わたしは水道の補助金担当

です。前は農政部にしまして、牧草地の除染と畜産の振興を担当していました。

家では、米は五〇aぐらい、転作で牛の餌を五〇aぐらい、あとはハウスで野菜を少しやっています。私が農業と関わったのは、いまから四年くらい前ですね。住んでいる地区に、保全管理だけしている田んぼがけっこうあったのですが、今後はもう補助金対象にならないということになって、このまま放っておけば荒

れるだけになってしまおうと心配した地域の人たちが集まりました。何か作れるものはないかということと相談するなかで、稲を青刈りして牧草のように丸めて牛の餌にするというのを、地域の五軒ぐらいの共同作業でやるというところからはじまりました。一〇aあたり八万円という大きい補助金も出るということだったので、そういう場合は誰かが事務をやらなきゃいけないですよ。

木幡 ああ、そういうとき役所の職員はぜったい呼ばれる(笑)。

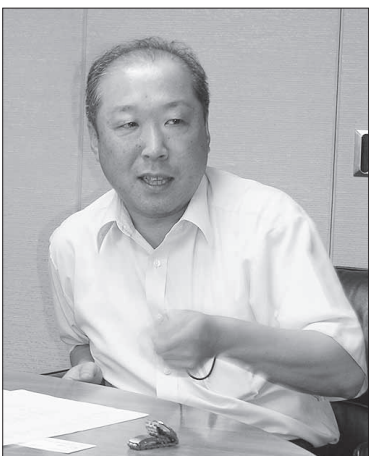
小原 そうなんです(笑)。そうなるとう然然、担当というか、わからないわけではなかったんで、窓口になっていろいろやらせていただきました。

● それぞれの地域の特徴

木幡 私の地域は、兼業農家がほとんどです。ただ平場のほ場整備されたような場所ではなく、かといって中山間地でもない。その手前くらいで、段々畑状態

のようなどころでやっていますので、誰かが借りてくれるような土地ではなく、自分でやらざるを得ない。大規模経営をしている農家も少ないので、公務員や農協、郵便局などに勤めている人が多いです。どこの家でも畑は作っているし、田んぼもちよつとやっています。それだけでは食べていけないので、勤めに出ているという状況ですね。

いい田んぼではないし、機械も昔は非常に高かったものから、以前は水稲協業組合というものがありません。一〇人ぐらい集まって、高いトラクターやコンバインを共同で買って、みんなで融通して使っています。昔は市内のあちこちにありましたが、兼業化がどんどん進んで、要はみんな勤め人ですから、週末に使用したいのでバッテリーするわけですよ。そうなる兼業農家は定期収入があり、お金は多少あるので、自分で中古などの機械を買うようになったんですね。実は私も二〇一五年に新車でトラクター



こはた・たかお ●宮城県角田市出身。一九九一年、宮城県角田市役所に入職。単組書記長・委員長を歴任。農政課係長を経て二〇一四年一〇月より現職。

おぼら・まさる ●岩手県花巻市出身、一九九四年、岩手県庁に入職。岩手県東部広域振興局農政部長兼農政振興課を経て、二〇一五年より現職。(元自治労中央執行委員 青年部長)



てきました、逆に刈り終わるとスカッと
して気持ちいいです。作業中は組合活動
や役所でのいやなことを忘れられますか
ら(笑)。健康診断でもひっかかりなくな
って、精神面、身体の健康にもいいみた
いです。
ただやはり土日農業なので、天候は週
末によくなくてくれるわけではないです
し、その時期その時期で、やらなければ

を買ってしまったんですが(笑)。
小原 機械の協同組合というのは私の地
域ではないですね。一軒一軒が機械をフ
ルセットで持っています。米農家もそう
ですし、果樹のリングゴが専業の農家が多
いんですが、みんな持っています。私た
ちの共同作業も、最初はリングゴなどの専
業の方にも声をかけたんですが、とても
手が回りませんということで、結局自分
たちだけで立ちあげたんです。でも共同
作業をやってみていちばん良かったと思
うのは、機械の使い方を教えてもらえた
りすることなんです。田んぼの入り
方とかいろいろあるんですよ。ほ場内を
耕耘する順番とか。
木幡 そうそう。ほ場にどこから入って
どこから出るとか、単純に行ったり来た
りじゃなくて、四隅に土が溜まらずき
れいに耕耘にする理屈があるんですよ
(笑)。
小原 そうなんですよ(笑)。そういうの
を教えてもらったり、あとは肥料ですね。

どのメーカーのがいいとか、そういつ
たことを相談しながらやれるのがいいで
すね。草刈り機の使い方、技術伝承と
までは言えないにしても、けっこう重要
じゃないですか。

●半農公務員の日常

座光寺 木幡さんのところの場合は、公
務員の方が多いということでしたけ
ど、小原さんのところはいかがですか。
小原 私のところは、戸数で言えば地区
で三四件くらいあるんですけど、公務員
は市役所の方一人で、あと旧職員のご
夫婦がお二人、県庁は私だけです。あ
とは建設業など普通の民間会社に勤めて
いる方ですね。
木幡 私の場合、地区では一番若い公務
員ですから、やっぱり区長さんが、こう
いう補助金がありそうだ、この地区で
受けられるんじゃないかなどと、まず私
に相談に来ます。要は、補助金の申請を
やってほしいということなんですけどね

ならない作業は決まっています。年次休
暇をとってやれば一番いいんですけども
、組合専従になる前は、年次休暇を
組合活動に使わなければならなかったの
で、なかなか時間のやりくりが大変でし
たね。
小原 時間のことで言えば、平日の午前
五時集合で出勤前に作業に行ったり
するのは、なかなかつらいですね。木幡
さんがおっしゃるように、作業には時期
があるので、どうしてもその時にやらな
ければいけませんから。それと、稲の青
刈り牧草づくりはまだ始めたばかりとい
うこともあって、実際収穫したものの品
質がよくなくて、返されたりすることも
あるんです。実際に私たちは牛を飼って
いるわけではありませんが、試しに食
べさせることもできないので、試行錯誤
しながらの作業になるんですよ。ちよつ
と泥がついても問題ないと思って混ぜ込
んでしまうと、一mくらいの大きな一口
ールがまるまる全部ダメだったりするん

(笑)。
やっぱり重宝がられているんだと思
います。会計をやるのも公務員か郵便局
員で、やっぱり信頼されているというか
間違いのないだろうということなんでしょ
うね。そういった意味では、都市部では
公務員は仕事もしないでとパッシングの
対象かもしれないですが、私が住んでいる
ような地区だと、地区の共同作業などに
も公務員が出ていますし、やっぱり普段
から関わっていれば、特段、公務員だか
ら云々言われることもないと私は思っ
ていますけどね。

座光寺 しかし役所の仕事と両立するこ
とには苦労もあるんじゃないですか？
木幡 昨日も実は午前中休んで草刈りを
していました。近所の手前もあります
し、荒らしているとイノシシが寄って
くるといこともあって、月に一度くらい
は全部草刈りをしなければならんで
す。最初はほんとうにきつくて、いやで
しょうがなかったんですけど、最近は慣れ

ですよ。そういうのはちよつと大変だ
なと思いますね。
木幡 私の母をみていると、もう七〇歳
を過ぎていますが、やっぱり仕事があ
いねいですよね。出荷の選別をしながら
きれいにふいたりとか、私たちがみたい
に雑な世代ではなかなかそこまでできな
いかな。

●地域の農薬を取り巻く状況

座光寺 さきほどからイノシシのお話が
出ていますが、それも大変そうですね。
木幡 そうですね。大規模化の難しい地
区である上に、昔は考えもしなかったイ
ノシシ被害が広がってきて、田んぼのま
わりに電気柵を張り巡らしたりしてい
るんですが、最近ではサルも出始めてい
まして、サルは電気柵を越えてしまうも
のですから、トウモロコシが一晩で全滅
ということもありましたね。

小原 岩手ではまだイノシシ被害は少な
いんですが、北上してきているという話

ざごうじ・なるお●一九六三年東京都生まれ。一九八二年、渋谷区役所に入職。渋谷区職員労働組合委員長、自治労東京都本部財政局長、副委員長、書記長を歴任。現在、自治労本部総合政治政策局政策局長（月刊自治研」編集長）。



は聞いています。シカは実際に増えていて、沿岸では野菜の苗を食べられてしまう被害も出ていて、次第に内陸に入ってきています。やっぱりハンターが獲って食べるようにしないと増え過ぎてしまいますよね。牛の放牧地に出没してきて、牧草を食べてしまうというようなことも聞いています。

木幡 角田市もイノシシ駆除に補助金を

がありまして、安倍内閣は農業政策の目玉にしていますが、要は、遊休農地が増えているところだけがクローズアップされて、白紙委任で農地を出しなさいというわけです。実は今でも農地の貸し借りというのは頻繁にやられています。それは相手を探してきて、相対で了解したものを農業委員会を通して契約を結ぶわけですが、中間管理機構は、それでは生ぬるいというわけです。誰でもいいから貸せるように白紙委任しろと。誰が借りるかわからない、誰が作るかわからないのでは、普通の農家は貸す気にはなれません。しかも、三年間で借り手が見つからなかったら返しますという制度なんですよね。平場のほ場整備された所なら借りる人はいますが、それ以外の所は難しいと思います。そういう農家や地域の実態と合わないような農地集積の方法とかは問題だなどと思いますね。もともと国策として戦後、食糧増産計画で、山の耕作しにくいところまで田んぼにさせてお

つけて、一頭一万円で買い取っていたんですけど、原発事故の関係で放射性セシウムが山に降ったものですから、イノシシの肉を測ったら一〇〇〇ベクレル/kgを超えたりして、とても食べられません。駆除だけをお願いして獲ってもらっていますが、モチベーションが違うんですよね。一万円の報酬をもらって、さらに食べられるから獲っていたというのがあるのに、とくに冬場の狩猟期でも誰も獲らなくなってしまうので、どんどん増える一方なんです。気候もちょっと変わってきてますしね。最近は雪が降らなくなつて越冬しやすくなった上に、天敵のキツネが減っています。キツネがイノシシの子どもを獲って食べるので均衡が取れていたのが、キツネが減って均衡が崩れている面もあるようです。

● 現状の農政のあり方

座光寺 苦労のたねはますます増えているような感じですね。日本の農業の将来

いて、いざ食糧難が去ったから、こんどは農家の労働力を工業に向かわせるために減反政策を始めたくせに、今になって農業は衰退していると言われても、それは違うでしょうと思っっているんですね。平場の大きなほ場のところだって、実は農家の頭数がいらないと草刈りだつて間に合わないんです。農地をきれいに管理するというのは、兼業農家も含めて、農家の頭数がいないと難しいんです。小規模農家を切り捨てるようなやり方は、私も農政サイドにいながらも、おかしいなというのがありましたね。

小原 私もそう思います。このまま農業の大規模化だけを進めようとしても、たぶん、先にその大規模専業農家がつぶれちゃうんじゃないかなと思います。岩手県の奥南の方の農政を担当していました。地域の専業農家の人をどんどん集積させていくと、兼業農家はやめていなくなつていくわけです。でもそうすると、田んぼの維持、途中の用水路などの草刈り

ということでは、どうお考えですか。

木幡 私は農業高校、農業短大と進んでも将来性はないなと思っっていましたので公務員になったわけです。資材単価はどんどん上がっているのに、輸人品に押されて高くモノが売れなくなっている。昔は米一俵二万円という時期がありました。今は、いまは半分ですからね。単純に米農家だと所得が半分になっているところから、私の家みたいな山手のところだけでやっていただけでは、とても食べていけない。それで地元の市役所に入りました。しかし、農業政策の担当に配属になってそこから見ていると、国の施策が見えないんです。若い時は良く分からず、国の言っている通りにすればいいだろうくらいに思っただけですが、組合活動もやって、いろんな情報に接していると、いったい国は農業をどうしたいのかわからなくなりました。

たとえば、農地中間管理機構というの

をやる人が少なくなつてしまつて、専業農家が一人でやらなければならなくなるんですが、一人で三〇haの草刈りなんてできないわけです。非常に困り始めている地域が出てきています。大きい農家が何軒かあつても、病気になつて倒れる方もいるわけです。そうするともう次の担い手がいらないんですよね。やっぱり地域として農業を維持していくには兼業も含めて一緒に地域でやっていかないと難しいんです。

私の地域にも完全に株式会社の民間の農業法人があるんですけど、彼らは「私たちは農地借りているだけですから」と言つて用水路の草刈りに来ないんです。おたくの農地に行く水の水路は、全員で管理しないといけませんよねと言つてもわかつてもらえません。言葉は悪いですけど、今はいいところ取りをしているだけなんです。

木幡 うちの方にもある株式会社の農業部門が進出してきて、地元の人を入れて

やっていますが、なかなか苦しいみたいです。ですよ。

小原 単価の問題ですよ。スーパーに行ってみなさんが買うときに、野菜の値段は多少高かったりとか変動しますよね。でもキュウリやトマトなど野菜の相場価格の二〇年くらいの推移を見ると、ほぼ横ばいです。でも資材、肥料とかは上がっている。だから苦しくなる農家が増えているのが現状だなと思っています。

木幡 六次産業化という施策も、結局販路次第なんですよ。私も役所時代に担当していましたけど、売り先をきちんと確保できるかがいちばん難しいですね。いまは農協がダメだということで、直売所を始めて自分たちで売るところまでやる農家も出てきましたが、なかなか難しいと思いますよ。それに、ブランド化といっても、それこそ役所や県の農業普及所の職員、研究機関と一体となって、販路も含めてやっていくくらいでないダメだと思っています。

その紅玉が、いま非常に東京などでニーズがあるんです。加工する場合にはむしろ酸味がある方がいいということ。

そういう情報はあるんですけど、生産者がそういうところに行くこともないですから、その情報にはなかなかたどりつかない。一方で、加工する側が使いたい、ほしいと思っても、じゃあ誰に聞けばいいのか。農協に電話しても、今は選果もしていません。でも実は地元で出荷している人はいるんです。そこを個人で紹介してつないでいくような仕組みに、たとえば役所が関わるようなことができれば、いろいろ新しい販路につながっていくと思うんですよ。そういう需要と供給であれば、まだ明るい未来はちょっとあるのかなと思います。

木幡 宮城にも似たようなケースがありますね。宮城はむかしササニシキという有名な米があつて、それが大冷害の年にいもち病でやられて、ほぼ壊滅状態になりました。いまはひとめぼれという品

私はいちばん良くなかったのが、農協が合併しちゃったことだと思っんです。

昔は、各自自治体一農協ぐらいたったんですが、今は仙南地域（仙台市より南の二市七町）で合併し「みやぎ仙南農協」となりました。かつては角田市農協が角田市の農産物のブランド化のためにと、一生懸命に売り方や品質も含めて考えていたのが、合併したために、仙南産と表示されて「角田産」という売り方ができなくなつたんです。当然、行政としては角田産として農産物や加工品が売れないのであれば、農協に補助金などを出すことはできません。仙南地域の全自治体が足並みをそろえれば別ですが、そこまでのことはできないと思います。ブランド化のために、調査研究や施設整備、PR活動を効果的に行うためには、一自治体一農協であることが理想です。

● これからの農業に展望はあるか

小原 ブランドの話で言いますと、たと

種にすっかり切り替わつたんですけども、実はササニシキで冷えてもおいしいので、お寿司屋さんにごい人気なんですよ。頼まれて細々とササニシキを作っている農家もいたようですが、二〇年近くもほとんど作られなかつたので、いもち病の病原菌がいなくなつて、最近また見直され作付も増えてきています。そういうニーズは、それなりの担い手と言われているような農家の人は、勉強熱心ですからきちんと情報として知っているんですよ。そこにどれだけ行政が関わられるかというと、なかなか難しいかもしれないですけどね。

そういう意味では、やっぱり農協だと私は思いますよ。とくに私の家のような小さな農家からすると、資材を全部買えますし、電話をすれば届けてくれたりするシステムもまだあるわけです。費用はあとで口座引き落としでもいいので、やはり楽です。やっぱり農協があるから、小さい農家もそれなりにやっていける。農

えば岩手県では前沢牛は東の横綱と言われていて、それが続くようにはなかなかならないですね。実際、取引してくれる業者さんを見つけれない。牛肉は高級なので、食べてくれるお客さんがだいたい決まってくるんです。また当初の出荷価格を維持できるかというと、そこもぎりぎりだったりして、出荷している農家さんが実際は減っていて、出荷量が落ちていたりするんです。ブランドを持つていてもです。

ただ、新しいチャンスもあるんですよ。たとえば紅玉というリングゴがありますが、実はスイーツやフランス料理のソースに合うということで最近注目されています。でも紅玉を作っているリングゴ農家さんはあまりいないですね。リングゴ農家さんは一箱五〇〇〇円といった贈答用で勝負しているので、すっぱい紅玉なんていう加工用のリングゴは作らないわけです。

産物を大量に購入して、しかも安定的にさばけるのは農協だけです。個人的には、究極の六次産業が農協だと思っているんです。でも農協がダメだというイメージがあつて、どんどん組合員が離れてしまつたので、打開しようとして金融や共済事業に力を入れ過ぎて、さらに組合員が離れて本来事業も展開できなくなるといふ悪循環に入っていると思います。農協の理念や組合員の声を無視すれば、こうなることはあたり前で、労働組合である自治労も他人事ではないと思います。

● 地域づくりを考える

コミュニケーションがカギに

小原 岩手の一閃に「ポラーノ」というジエラト屋さんがあるんです。二〇年くらい前からやっているんですが、大変人気があります。でもそもそもは、やはり地区で、このままでは農業は大変だ、どうしたらいいかとみんなで頭をひねっていたところ、厳美溪や栗駒山に登山する

お客さんがそこを通ることから、登山客を何とかそこで止められないかというところがはじまりなんです。はじめは小さな建物でしたが、味も良いですし、地元の山菜を使った変わったジェラートなんかもあって話題を呼んで、車が渋滞するようになってしまつて、田んぼ一枚をつぶして駐車場を広げたりしました。ここを通る人に、なんとか一つでも買つてもらおうと地域の人で考えてそこまでされた。若い娘さんがそこに就職して、雇用になつていたりもします。やっぱりその地域の課題をなんとかしたいという話ができるコミュニティが残っているかどうかは大きいなと思つているんですけどね。

木幡 それは確かにそうですね。あとはコンセプトがしっかりしているかどうか。こうしたいんだということが、きちんと話しあわれているところが成功しているのかなと思いますね。農業技術と一緒に、ある地区の農業技術を他に持つてくれば

合うかというところ、そうじゃないんですよ。やっぱり地域に合ったやり方があるの、そういう部分を話さうのは、やっぱり地域の人じゃないとダメなんですよ。

以前、まちづくりを担当したこともあって、やっぱり地域力ってあるんですよ。私の地元でも、有志の人たちで「地区を明るくする会」というのを作っています。かつては一大養蚕地域だったんですが、中国の安い生糸におされて養蚕農家はすべて無くなりました。結局、桑畑だけが残り、桑の木が7mほどに伸びて荒れた密林状態になっているんです。それがイノシシの住処になっているというのもあって、なんとかしたいねと地元で飲んだときに話になって、じゃ抜根しようということになって勢いで作った会なんです。みんな家にはチェーンソーもあるし、バックホーを所有している人もいたので、伐採から抜根、トラクターで耕耘までやって、五〇aをきれいな更地

にしました。今はひまわりを作付したりしているんですが、更地になったので資材置き場に使わせてくださいとか、ソーラー発電をやりませんかという話がありました。どんどん広がるんですよ。ちょっとそれで味をしめて、他の荒れているところを請け負うことになって、今年のもも抜根する話が来ています。

地元の地域力が、話しあいのなかで見えてきたり、お互い新しいものはなくても、持っているもので何とかしようという、そういったところが今後、とくに重要になつてくるんじゃないかと思えます。**座光寺** 地域の力、コミュニティの力がポイントなのでしょうね。本日はありがとうございました。

二〇一六年八月三日 於…自治労宮城県本部